
赤く染まる記憶

あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤く染まる記憶

【Nコード】

N0351Y

【作者名】

あい

【あらすじ】

とあるカップルの、何度も繰り返される1日のお話。

1話

8月15日

今日は待ちに待った彼とのデート。
昨日遅くまで考えた服を着る。すると、彼から電話が来た。

『どうしたの?』

「いや、なんとなく。」

「そっか。折角なんだし、オシャレしてきてよ?」

『当たり前じゃん。』

少しの間だけ笑い合っつて、電話を切った。

カーテンの隙間から漏れる朝日が暖かい。日曜日だからか、朝から家の前を走る車の音が何度も聞こえてくる。

『よし。』

ある程度化粧を施して、家を出た。

彼の家と私の家の中間地点にある公園で待ち合わせをしている。公園に近づけば近づくほど、人の顔が鮮明に見えてくる。そして、彼を見つけた。大きく手を振ると、コツチに気付いた彼も手を振り返してくれた。

『ごめん、待った?』

「今来たところだから大丈夫。」

『そっか。じゃ、行こっか。』

私が歩き始めると、彼は私の横に来てさりげなく手を繋いでくれる。微笑みながら、公園を出る。横断歩道を渡っていると、彼は急に手

を離した。そして、私を突き飛ばす。
耳を劈くような女性の悲鳴が聞こえた。目の前が真っ暗になった。

2話

あの夢は何だったのだろうか。そう思いながら着替え始める。すると、携帯が鳴る。ディスプレイには彼の名前。背筋が寒くなった。

『偶然、だよ。』

変な考えを取り払って、通話ボタンを押した。

私が黙っていたことに疑問を覚えたからか、「どうした？」という彼の声が聞こえた。そんな彼の一言で安心するなんて、恋ってすごいと思う。『なんでもないよ』と返すと、「なんだよそれ」と笑いを含んで返ってきた。

『それで、朝から電話なんてどうしたの？』

「いや、なんとなく。」

そうだ。折角なんだし、オシャレしてきてよ？」

『当たり前じゃん。』

少しの間だけ笑い合って、電話を切った。私はそのとき、彼のおかげで夢のことを忘れていた。

そして、忘れたまま公園へ向かった。彼はまだ来ていなかった。少しすると、彼が走ってきた。

「ごめん、待った？」

『私もさっき来たところだから。息切れてるけど大丈夫？』

「大丈夫だ。行くよ。」

『え、ちよつと待ってよ！』

走っていた彼を、急いでバッグを掴んで追いかけた。

彼は横断歩道の真ん中でコツチ見て笑いながら手を振っていた。
瞬間。彼のいた場所が真っ赤に染まった。

『嘘、嘘だよ。そんなはずない！だって彼、さっきまで・・・笑っ
てたのに！』

彼が死ぬなんて、ありえない。そう思ったとき、サブディスプレイ
に表示されていた時計の数字が反対に進み始めた。

3話

目を覚ますとベッドの中にいた。何故自分が此処にいるのか、わからない。

彼が死んだショックで、動くことが嫌になっている。

そして、携帯が鳴る。ディスプレイには彼の名前。いつもの癖で、何事もなかったかのように通話ボタンを押してしまった。

『はい。』

「どうした？どこが悪いのか？」

彼の心配そうな声を聞いて、私は幻聴を聞いているんだと思っってしまった。

『大丈夫。』

「そうか？」

あ、今日のデートのことなんだけどさ

『デート？ああ、デートね。私まだデートとか望んでたんだ。』

自分の欲望に、苦笑する。

「はあ？お前何言ってるの。」

『あのね、私頭おかしいんだよ。死んだはずの人がこうして電話を掛けてくるなんてありえないのにな。幻聴が聞こえるんだ。』

自分で言っていてバカみたいに思いながら、自嘲するように笑った。

「おい。いい加減怒るよ。俺は死んでない。」

携帯の向こう側から、彼の怒気を含んだ声が聞こえてきた。

『死んでるよ。だって昨日、デートの途中でトラックに轢かれたじやん。』

「何のことだよ。大体、死んでたらこんな風にお前と話せないだろ。」

『この声は私が作った幻影だよ。』

「もう知らねえ！今日のデートは無しだ。」

そして、ツーツーという音だけが耳に響いた。

顔を洗って、遅めの朝食を食べて、またベッドに横になった。

外ではサイレンが鳴り、騒がしい。どこかで事件が起こったみたいだ。私は心の中で「ザマーミロ」と呟いて、イライラしながらも眠りに着いた。

午後5時。朝食を食べ損ねた空腹で目を覚ます。

適当に料理をして、テレビの前に座った。たまたまニュースが流れていた。

例の連続放火事件の話だった。興味がなかった私は、食事のほうに意識を向けた。すると、ニュースのアナウンサーに呼ばれる彼の名前。テレビ画面には、彼の顔写真が載っていた。

彼が死んだ。いや、生きていた。それなのに……

『私のせいで彼が死んだ？……そんなはずないよね。だって、死んでたはずだもん。』

私の中で何かが過って、携帯を開く。ディスプレイには、「17:22」と記されてある。日付は、

『嘘……。』

「8月15日」。昨日のままだ。それは、携帯が壊れているというわけではない。

昨日・・・、いや、前の8月15日のことを振り返る。目の前が真っ暗になる前に、携帯に表示されていた時間が、戻っていった。それが午前11時頃の出来事だ。午前11時から同じ日の午後5時にはならない。

つまり、どういうわけか同じ日を繰り返したということ。

今日の着信履歴には彼の名前。それは、今日、8月15日には確実に彼は生きていたという証。私があんなことを言わなければ彼はまだ生きていたかもしれない。

『私が殺したんだ・・・ッ!』

もう一度、やり直したい。そう願った。そして、時間が巻き戻る。

4話

また、ベッドの中で目を覚ました。急いで携帯で確認する。

『8月15日の、午前10時。・・・戻った。』

そして、前回と同じように彼から電話がかかり、公園へと向かう。公園には彼がいて、2人で手を繋いで公園を出る。

『ねえ、ちよつと寄り道しようよ。』

「珍しいね。何か買いたい物でもあるの?」

『特にないけど・・・そう、散歩!駄目かな?』

「別にいいよ。」

少し強引に、彼が横断歩道を渡らないように手を引いた。1秒でも早く横断歩道から離れたくて、彼の手を引きながら少し走った。走りながら一度振り返った。

9

『あのさ・・・』

「あ、危ない!」

何が起こった?また彼が真っ赤に染まっているのは何で?私のせいだ。彼が、降ってくる鉄骨から私を庇ってくれた。突き飛ばされてくれた。

『またなの?また、私のせい?』

後ろで工事していた人が何かを叫んでいる。私には何も聞こえない。

人々は、血だらけの彼の前でへたり込んでいる私に好奇や哀れみの目を向けてくるが、気にせず叫んだ。

『何で私たちなの？そんなに彼を殺したいの？そんなに私たちを引き裂きたいの！？神様は卑怯だ……。』

今度こそは……。そう思うと、また時間は巻き戻る。そして私はまた罪を重ねるんだ。

それでも私は決めた。絶対に彼と8月15日を生き延びてやる、と。

何度も、何度も、時間を巻き戻した。彼を……。殺してしまった。交通事故で、死んでいった。家ごと焼けて、死んでいった。鉄骨が落ちてきて、死んでいった。通り魔に刺されて、死んでいった。急に彼の持病が悪化して、死んでいった。

こんなことが、何10回も繰り返された。私はもう彼の死んでいく様を見て涙を流せなくなった。精神も疲れきって、次で最後にしよう。そう決めて、時間を巻き戻した。

最終話

今回で最後。そう、もう一度心の中で呟いて起き上がった。聞き飽きた着メロが流れる。

「もしもし、もしもし！」

『え？あ、はい……。』

電話を掛けてきたのは、彼の母だった。話を聞くと、彼の持病が昨日の夜中に悪化して、入院中との事。今は調子がいいので、見舞いに来て欲しいと言われた。今までにない、変化が起きた。少しの変化なのに私は喜んで彼の病室に向かった。

『コンコン。』

ノックの代わりに、手を狐にして遊んでみる。浮かれている今の私に羞恥心はなかった。

「何やってるの。ほら、入って来なよ。」

彼は少し笑いながら言う。こんなに安心したのは久しぶりかもしれない。

『で、大丈夫なの？』

「当たり前だよ。ちよつと悪化しただけだし。すぐ退院できるよ。」

『そっかそっか。はい、これお土産。』

「何この果物の量。」

『いいじゃん。安かったんだから。』

バナナ、リンゴ、ブドウ、桃。他にも色々詰まっている籠を渡した。

「普通お見舞いの品を安さで決める？ちょっと酷いよ。」

彼は苦笑いしながらも受け取ってくれる。

こんな病院の個室なら彼が死ぬ確率は少なくなるため、私は安心してきっていた。

すると、彼は顔を引きつらせた。

『どうしたの？』

「あのさ、お手洗いきたいんだけど・・・」

『やだよ。』

入院中、彼の移動手段は車椅子になる。なんか、うまく立てなくなるらしい。だからお手洗いにも1人じゃ行けない。

「お願いだからさ。」

『そんなに？さっきまでお母さんいたんじゃないの？』

「2時間前に帰った。早く早く！」

『はいはい。』

いざ男子トイレの前まで行ったものの、さすがに私も女だから入りづらい。しかし、彼のためにはと思い、我慢して入っていった。

そう、さっきまでそんなバカみたいに穏やかな日常だったはず。なのに何故彼は血だらけなのか。何故私の手は赤いのか。何故私が赤く染まった果物ナイフを持っているのか。鏡に映った私は、彼の血を浴びていた。

彼を殺したのは、私。

その結論にたどり着くと、私の頭の中に記憶が流れ込んできた。

1つ目は、トラックの運転手にお金を払っている私。
2つ目は、工事現場のおじさんにお金を払っている私。
3つ目は、フードを被った男を脅している私。
4つ目は、彼の飲むコーヒーに薬を入れている私。
覚えられないくらい、次々と入ってくる。

『そっか。彼を殺そうとしていたのは神様じゃなくて私だったんだ。』

病院の屋上へ駆け上がる。柵を越え、建物のギリギリで足を止めた。

『私が死ねば、もう時間は巻き戻らないよね。悪夢は終わるんだよね。』

全部、全部私のせい。ごめんなさい、ごめんなさい。』

そう呟いて、前に倒れこんだ。

落ちる際に、クルクル回る私の身体。世界が一望できた様で楽しかった。

私の中に残っていた最後の一粒を目から落として、地面にぶつかるのを覚悟して目を瞑った。

死ぬ直前、誰かの笑い声が聞こえた気がした。

事件調査記録。

8月15日。

場所：未来病院

*****の恋人。

4階の男子用トイレにて*****に果物ナイフで腹部を刺され、
大量出血にて死亡。

*****の恋人。

4階の男子用トイレにて*****を刺した後、未来病院の屋上から
飛び降り自殺。

*****は二重人格である。

警察は*****のもう1つの人格の暴走だと視ている。

関係者の名前は、何らかの理由で出来た赤黒い染みにより読めなくなっている。

最終話（後書き）

私にも、彼らを引き裂こうとしていたのはもう一人の「私」なのか、神様なのかわからないんですね。

時間を戻していたのは神様ですし、「彼」を殺そうとしていたのはもう一人の「私」ですし。

もしかすると、もう一人の「私」が神様だったり。でも、それだと何故殺せたのに巻き戻すんだって感じですよ。

きっとアレです。もう一人の「私」も「彼」が好き。それなのに、

「彼」には「私」がいて、嫉妬する。でも好きだから生き返らせる。

・・・みたいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0351y/>

赤く染まる記憶

2011年10月29日23時16分発行